

食料・農業・農村政策審議会 家畜衛生部会
第 91 回家きん疾病小委員会 概要

1. 開催日時：令和 6 年 10 月 18 日（金）13 時 30 分～15 時 00 分
2. 開催場所：オンライン開催
3. 出席委員（50 音順、敬称略）
臨時委員：砂川 富正、山口 剛士（委員長）
専門委員：岩科 友希、内田 裕子、大谷 芳子、白田 一敏、森口 紗千子、山本 健久
4. 議題：
 - （1）北海道における高病原性鳥インフルエンザの疑似患畜の確認事例について
 - （2）北海道における疫学調査チームの現地調査結果について
 - （3）今後の防疫方針について
5. 概要：
 - （1）発生農場及び周辺における防疫措置の強化継続
「高病原性鳥インフルエンザ及び低病原性鳥インフルエンザに関する特定家畜伝染病防疫指針」に基づき、引き続き、当該農場の飼養鶏の殺処分及び埋却、制限区域の設定、当該農場周辺の消毒強化及び消毒ポイントの設置等の必要な防疫措置を実施・継続すること。
移動制限区域内及び搬出制限区域内の農場で、毎日の死亡家きん羽数、特定症状の有無等についての報告を求めること。
 - （2）疫学調査チームの現地調査概要
別添のとおり。
 - （3）疫学調査及び研究の実施継続
本病のまん延防止と再発防止のためには、感染経路につながる情報の収集が重要であり、科学的なデータに基づいた疫学調査が不可欠である。このため、①疫学調査チームによる現地調査、②ため池等の周辺環境や、鶏舎床、換気口等の農場内の環境材料からのウイルス分離及び遺伝子検査、③海外の野鳥分離株、国内の関係機関等が実施する野鳥調査における分離株等と、発生農場分離株との遺伝子比較解析等により、国内や農場内への侵入経路を考察し、これを防疫措置に活用すること。
 - （4）今後の防疫対応の徹底について
本事例はこれまでで最も早い家きんでの初発事例であり、野鳥での発生を踏まえると、既に国内にウイルスが侵入してからある程度時間が経過しており、さらに、渡り鳥の飛来が既に本格化する中で、今シーズンは環境中のウイルス濃度が高くなる可能性があることから、全国どこで発生してもおかしくないことを念頭に、最大限に警戒すべきである。また、過去に発生があった農場での発生であり、これまでも、過去に発生が確認された地域については、「高病原性鳥インフルエンザの防疫対策の徹底について」（令和 6 年 9 月 12 日付け 6 消安第 3505 号農林水産省消費・安全局長通知）等により、既に発生する環境要因が揃っており、発生リスクが高い地域であることから、重点的に指導を行うよう求めてきたところであるが、都道府県は、当該地域については、改めて飼養衛生管理の徹底を指導すること。それ以外の地域であっても、前述のとおり、全国各地で環境中ウイルスが増加し、発生するリスクは高まっていると考えられることから、家きん飼養者に対して、手指消毒や専用手袋の着用、衣服や長靴の交換

など基本的な飼養衛生管理の徹底に努めるとともに、飼養家きんの毎日の健康観察、異状の早期発見・早期通報の再徹底を指導すること。さらに、ウイルスの人又はカラス等の野鳥等を含む野生動物を介した農場内及び家きん舎内への侵入防止対策だけでなく誘引防止対策の徹底について、改めて点検し指導を徹底すること。加えて、埋却地及び焼却施設等の確保等の疾病発生時の円滑な防疫措置に必要な事前準備をすること。

北海道厚真町（国内 1 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和 6 年 10 月 17 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 基本情報

用途（飼養羽数）：肉用鶏（約 1.9 万羽）

家きん舎の構造及び数：セミウインドウレス鶏舎、18 鶏舎（うち 15 鶏舎は発生時オールアウト済みで空舎）

家きん舎の飼養形態：平飼い

2 施設の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は平野部に位置し、周囲を林に囲まれていた。
調査時、農場から約 0.9km 離れているため池には、コガモ 173 羽、カルガモ 52 羽、マガモ 22 羽など計 255 羽のカモ類が、約 1.6km のため池には、コガモ 149 羽等のカモ類計 160 羽が確認された。また、農場から 2.3km 離れた牛農場では、ハシブトガラスが 130 羽以上確認された。
- ② 農場の衛生管理区域内には沈殿池が存在していたが、防鳥ネットが張られており野鳥の痕跡のない状態だった。
- ③ 当該農場はセミウインドウレス鶏舎 18 棟からなり、発生時は 3 棟で肉用鶏が飼養されていた。その他 15 棟は食鳥処理場に出荷済みであった。
- ④ 当該農場は、令和 4 年 10 月 28 日に高病原性鳥インフルエンザの発生が確認された令和 4 年シーズン国内 2 例目の発生農場であった。

3 通報までの経緯

- ① 農場によると、発生鶏舎（通報時 46 日齢）では、1 日当たりの死亡鶏は 20 羽程度であったが、10 月 14 日に 40 羽、15 日に 60 羽と死亡の増加が続き、16 日の午後に 120 羽の死亡が確認されたことから、管理獣医師に連絡したとのこと。その後、当該獣医師が農場に立ち入り簡易検査を実施したところ陽性となったことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ② 発生鶏舎は農場西側に位置しており、死亡鶏は鶏舎入口付近に多く確認されたとのこと。通報時に鶏を飼養していた 3 鶏舎のうち発生鶏舎のみで死亡羽数の急激な増加が認められたとのこと。
- ③ 調査時、発生鶏舎では飼養鶏の活力が全体に低下しており、多くの死亡鶏が認められた。一方、発生鶏舎以外の鶏舎では特段の異状は認められなかった。

4 管理人及び従業員

- ① 当該農場では、農場専属の飼養管理者 2 名が飼養管理等を行っており、系列会社の飼養管理部門の担当社員 1 名が週に 3 日程度来場し、鶏舎内の状況を確認しているとのこと。
- ② 担当社員は系列農場 2 か所を担当しており、1 日に 2 農場へ立ち入ることがあったが、立入り時にはそれぞれの農場でシャワーイン・シャワーアウトを行い、それぞれの農場専用の作業着、長靴、手袋を着用していたとのこと。
- ③ 飼養管理者は鶏舎ごとの担当分けはしていないとのこと。

5 施設の飼養衛生管理

- ① 農場によると、車両が農場に出入りする際は、農場入口に設置された動力噴霧器で車両消毒を実施しているとのこと。
- ② 農場によると、飼養管理者、担当社員及び鶏舎に立ち入る外来者は、農場に入る際、シャワーを浴びた上で農場専用の作業着、長靴に交換し、手袋を着用している

とのこと。

- ③ 従業員が各鶏舎に入る際は、鶏舎入口内側に設置された石灰槽内に鶏舎外作業用の長靴を脱ぎ、鶏舎内に設置されている専用長靴に履き替え、手指消毒を実施しているとのこと。
- ④ 鶏舎に立ち入らない外来者は、農場内専用の作業着、長靴に交換していたとのこと。
- ⑤ 鶏舎の側面は、壁面上部と下部に吸気口があり、下部の吸気口では開閉用の蓋の外側に網目が約2cmの金網が設置されていた。開閉用の蓋は、コンピュータ制御により舎内温度に応じて自動で開閉するとのこと。また、壁面下部の吸気口では、人力で開閉可能なパネルの内側に網目が約2.5cmの金網が設置されていた。発生鶏舎では、夏季にはパネルを開けており、10月に入ってから気温が低下したので閉めていたが、10日程前から気温が上昇したので再び開けていたとのこと。
- ⑥ 鶏舎天井には排気ファンが設置されており、防鳥ネット等は設置されていなかったが、通常は常時稼働していたことから、野生動物の侵入は困難と考えられた。また、舎内の大型換気扇を全て稼働させる際は、電力が不足するため、天井の換気扇を停止していたが、この際には、排気口の鶏舎内側に設置されたシャッターを閉鎖していた。発生鶏舎でも、過去一週間程度の間にこうした対応をすることがあったとのこと。
- ⑦ 鶏舎横の飼料タンク上部には蓋が設置されており、全ての鶏舎で鶏舎内のラインを通じて自動給餌を行っていた。
- ⑧ 飼養鶏への給与水は井戸水を利用しており、ろ過した上で塩素消毒を実施していたとのこと。
- ⑨ 通常、数日かけて農場全体のオールイン・オールアウトを行っており、オールアウト後は5日程度かけて鶏舎内の除糞と清掃・消毒を行い、その後の空舎期間を5日程度設けていたとのこと。
- ⑩ 直近の鶏の出荷及び鶏糞の運び出しは10月15日が最後だったとのこと。
- ⑪ 死亡鶏は毎日の健康観察時に回収し、農場内専用車両で農場入口のすぐ外側にある蓋付きの容器に保管していた。容器内の死体は、自社運送車で輸送しており、最後の回収は10月15日であったとのこと。調査時には発生鶏舎の死亡鶏が容器に保管されていたが、それ以外の2鶏舎の死亡鶏は、それぞれの鶏舎内に保管されていた。
- ⑫ 鶏の出荷や鶏糞の運び出しに用いる重機や車両は系列農場と共有していた。鶏の出荷は10月9日、鶏糞の運び出しは10月15日に作業を開始しており、その際に作業に必要な重機が他農場から持ち込まれていたが、その後は発生農場内で使用されていた。これらの重機が農場間を移動する際には、移動前農場を出る際と移動先農場に入る際のそれぞれで、動力噴霧器による洗浄・消毒を実施していた。

6 野鳥・野生動物対策

- ① 農場内では野生動物はほとんど見かけず、野鳥ではカラス、セキレイを見るほか、まれにキツネ、シカ、リスを見たことがあるとのこと。
- ② 鶏舎内ではネズミを見かけることはほとんどないが、まれにハツカネズミと思われるネズミが罠にかかることはあったとのこと。調査時には、発生鶏舎内では明確なラットサインは認められなかった。
- ③ ネズミ対策として全鶏舎内に粘着シートを設置していたとのこと。

7 前回発生以降の改善

- ① 当該農場では、前回の発生以降、鶏舎周辺の消毒を強化したことに加えて、使用済みの長靴の消毒を消毒薬につけ込む方法に変更したり、使用する手袋を毎日交換するといった改善を行っていたとのこと。

(以上)